

ニホンライチョウの記載に関する歴史研究

伊東 剛史

はじめに

長野県の県鳥であるライチョウは、キジ目キジ科ライチョウ属の種ライチョウ (*Lagopus muta*) の亜種 (*Lagopus muta japonica*) である (図 1)^[1]。種としてのライチョウは、北半球北部に広範に生息し、多くの亜種が存在する。その中で、日本のライチョウは、御嶽山や乗鞍岳などの高山帯に生息するが、生息数の減少が続き、環境省作成のレッドリストに掲載され、「近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの」に分類されている^[2]。なお、種名のライチョウと区別するために、とくにこの日本固有の亜種を「ニホンライチョウ」と表記することもある。現在、日本鳥学会が改訂第 8 版を準備中の『日本鳥類目録』では、*Lagopus muta japonica* の和名は「ライチョウ」であるが、本稿では種としてのライチョウと、亜種としてのニホンライチョウの区別を日本語表記においても明示するため、*Lagopus muta japonica* を「ニホンライチョウ」と記す^[3]。また、その他の亜種についても、便宜的に「○○ライチョウ」と表記する。

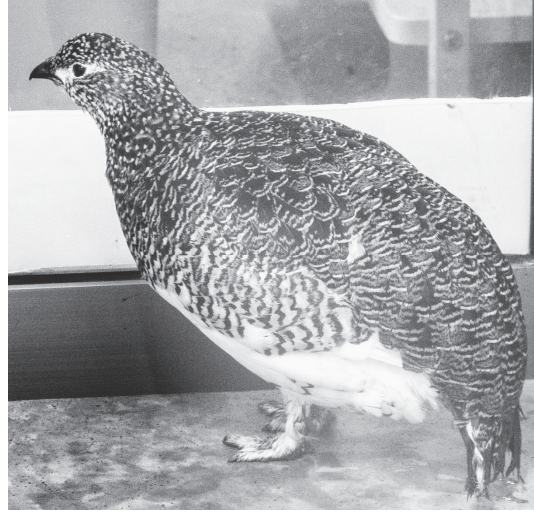


図 1 ニホンライチョウ

大町山岳博物館附属園にて著者撮影

ニホンライチョウの学名が記載されたのは、アメリカの動物学者オースティン・クラーク (Austin H. Clark) が、1907 年にアメリカ合衆国国立博物館の紀要である *Proceedings of the United States National Museum* (以下、*PUSNM*) において発表した、「東アジアおよびアリューシャン列島の鳥類 18 新種・1 新属」と題する論文においてであった^[4]。しかし、この論文は冒頭でクラーク自身が述べているように、鳥類採集家のピエール・ジュイ (Pierre Louis Jouy) が韓国で収集した標本の分析を主な目的としており、なぜその中で、ニホンライチョウがとりあげられ、記載されたのかは不明である。一方、ニホンライチョウのタイプ標本とされた標本の来歴については、河合久仁子によるアメリカ合衆国国立自然史博物館 (以下、慣例に従い「スミソニ

アン博物館」と表記する) 所蔵の標本と関連文献の調査により、次のことが明らかにされた [5]。すなわち、ジューイは日本に鳥類採集に赴いた際にライチョウの捕獲を目指したが不首尾に終わったこと、その後に東京帝国大学理科大学(現在の東京大学理学部)博物館からスミソニアン博物館にニホンライチョウの標本が送られていたこと、そして、その標本は1888年に御嶽山で採集されたものだったことである。したがって、標本の採集から新種としての記載までには、約20年の空白期間があったことになる。本稿の目的は、これらの先行研究の成果をふまえつつ、アメリカの鳥類学者によるニホンライチョウの記載が、どのような経緯で行われたのかを、当時の鳥類採集と鳥類学研究との関係に着目して明らかにし、この空白期間の歴史を埋めることである。

なお、ライチョウ属は、*Lagopus lagopus* Linnaeus, 1758(カラフトライチョウ)、*Lagopus leucurus* Richardson, 1831(オジロライチョウ)と*Lagopus muta*の三種に分類され、それぞれの種は生息地によりさらに多くの亜種に分類される。他にも、一般に「ライチョウ」と呼ばれる鳥類には、ライチョウ属の種以外にも北海道に生息するエゾライチョウ(*Tetrastes bonasia* Linnaeus, 1758)(図2)や、ヨーロッパオオライチョウ(*Tetrao urogallus* Linnaeus, 1758)のようにライチョウ亜科のライチョウ属以外の属に属する種も存在する。

本稿が扱うニホンライチョウは、先述のとおりライチョウ属の*Lagopus muta*の亜種のひとつ



図2 エゾライチョウの展示標本

帯広百年記念館所蔵(著者撮影)

に位置づけられるが、記載当初の表記は*Lagopus mutus*であった。それは、ギリシア語由来の属名*Lagopus*(ウサギのようにふさふさした足の意)が男性名詞であると誤解され、それにあわせて語形変化した種名が用いられたからである。しかし、*Lagopus*が女性名詞であるため、それにあわせて種名を修正すべきという提唱が21世紀に入ってなされ、近年では修正後の学名が普及している [6]。以上の経緯から、ライチョウの当初の学名は、*Lagopus japonicus*であり、*Lagopus mutus*(当時の表記)とは異なる新種として記載されたが、その後、*Lagopus mutus*の亜種である*Lagopus mutus japonicus*として扱われるようになり、さらに学名の修正後は、*Lagopus muta japonica*と表記されるようになった。本稿では、ライチョ

ウ、もしくはニホンライチョウなどのライチョウの亜種に言及する際には、混乱を避けるため、とくに説明がない限り今日の学名を用いる。ただし、引用の中に登場する学名など、当時の文脈を重視する場合には、史料に登場する学名をそのまま用いる。新旧学名の照合には、Avibase (<https://avibase.bsc-eoc.org/avibase.jsp>) を活用した。

(1) クラークとアルバトロス号の探検航海

まず、ニホンライチョウが記載されたクラークの論文「東アジアおよびアリューシャン列島の鳥類 18 新種・1 新属」(1907 年)を見ていこう。クラークは、この論文が主に故ジューイが採集した標本コレクションに基づくと述べている。後述するように、鳥類採集家のジューイは、3 年半に及ぶソウル滞在を通じて朝鮮半島の鳥類標本を集め、スミソニアン博物館に送った。その標本群は、ソウル、釜山、済物浦、対馬などで採集された 554 点の標本を含んでいた。しかし、この論文でクラークが新種として記載した種には、ジューイ以外の人物が採集した標本も含まれている。表 1 は、クラークが新種・新亜種として記載した 18 種の一覧である。新種と新亜種の内訳は前者が 4、後者が 14 だが、その後の分類体系の再編を経て、現在では全てが亜種として扱われており、それにともない学名も変更されているものが多い。記載者として認められたのは、18 種のうち半分にとどまる。残りは、種もしくは亜種としての独立性が認められなかったか、クラークより先にロシアの鳥類学者、セルゲイ・ブトゥルリン (Sergei Buturlin) が記載していたものである。

採集者と採集地という観点から区別すると、ジューイが採集したものが 13 点あり、そのほとんどが韓国で採集されている。一方、北海道で採集されたものが 1 点、本州で採集されたものが 2 点含まれている。前者がエゾフクロウ (図 3)、後者がホンドフクロウとニホンライチョウであり、どれもクラークが記載者として認められた。標本はオスであり、その採集地は「mountains of central Hondo」、採集日は「1888 年 7 月 7 日」、採集人は「M. Kikuchi」と記載されている。また、タイプ標本はスミソニアン博物館が所蔵し、そのカタログ番号が「121179」であるとも記載されている。管見の限り、このようにタイプ標本の所蔵場所やレファレンス番号、採集日、採集地、採集人などの情報も含めて記載することが、この頃には記載論文の標準になりつつあった。しかし、スミソニアン博物館でこの標本を調査した河合の研究により、採集日に誤りがあることがわかった。標本に付けられたタグには、採集日は 1888 年 7 月 29 日とある。さらに、タグには採集地がより詳しく、「Mitakesan, Kiso」(御嶽山、木曾)と書かれた^[7]。

現在、スミソニアン博物館の標本コレクションは、オンライン公開されているため、カタログ番号や学名をもとに検索すれば、この標本やタグなどの画像データを確認することができる^[8]。

表 1 クラーク「東アジアおよびアリューシャン列島の鳥類 18 新種・1 新属」による新種・新亜種記載一覧

論文掲載時の 種名・亜種名	分類 区分	カタログ 番号	雌雄の 区分	採集年月日	採集地	採集者	現在の学名	和名(種名)	注記
1 <i>Ardea cinerea juyi</i>	新亜種	114429	オス	1883 年 7 月 4 日	ソウル	P. L. Jouy	<i>Ardea cinerea juyi</i> , 1907	アオヤギ	
2 <i>Phasianus karpovi</i> <i>buturkini</i>	新亜種	114627	オス	1885 年 5 月 21 日	対馬	P. L. Jouy	<i>Phasianus colchicus karpovi</i> Buturkin, 1904	コウライギジ	<i>Phasianus colchicus karpovi</i> とは異なる対馬に生息する新亜種であると主張された。
3 <i>Lagopus japonicus</i>	新種	121179	オス	1888 年 7 月 7 日	本州中央	M. Kikuchi	<i>Lagopus muta japonica</i> Clark, AH, 1907	ライチョウ	現在はライチョウの日本固有の亜種として分類される。標本のラベルには採集日は、7 月 29 日と記されている。
4 <i>Lagopus rupestris</i> <i>chamberlaini</i>	新亜種	131867	オス	1893 年 7 月	アリューシャン列島ア ダック島	C. H. Townsend	<i>Lagopus muta chamberlaini</i> Clark, AH, 1907	ライチョウ	現在は、 <i>Lagopus muta atkensis</i> Turner, 1882 のシノニムとして扱われる。
5 <i>Aesalon regulus</i> <i>insignis</i>	新亜種	114580	オス	不明	釜山	P. L. Jouy	<i>Falco columbarius insignis</i> Clark, AH, 1907	コチヨウゲンボウ	
6 <i>Cerchmeis perpallida</i>	新種	114579	オス	不明	釜山	P. L. Jouy	<i>Falco tinnunculus tinnunculus</i> Linnaeus, 1758	チヨウゲンボウ	
7 <i>Bubo tenuipes</i>	新種	114518	オス	不明	釜山	P. L. Jouy	<i>Bubo bubo kiauutschensis</i> Clark, AH, 1907	ウシミズク	
8 <i>Syrnium ma</i>	新種	114439	メス	不明	釜山	P. L. Jouy	<i>Strix nivicolom ma</i> Clark, AH, 1907	ヒマラヤフクロウ	
9 <i>Syrnium uralense</i> <i>japonicum</i>	新亜種	96393	メス	1882 年 10 月 18 日	札幌	不明	<i>Strix uralensis japonica</i> Clark, AH, 1907	フクロウ	エゾフクロウ。標本のラベルには、採集人は、「T. M. Blakiston」と記されている。
10 <i>Syrnium uralense</i> <i>hondoense</i>	新亜種	109441	オス	1886 年 2 月 2 日	磐城	不明	<i>Strix uralensis hondoensis</i> Clark, AH, 1907	フクロウ	ホンドフクロウ
11 <i>Dryobates leucotos</i> <i>corensis</i>	新亜種	114112	オス	不明	釜山	P. L. Jouy	<i>Dendrocopos leucotos leucotos</i> (<i>sincus</i>) Buturkin, 1907	オオアカガラ	
12 <i>Dryobates leucotos</i> <i>ussurianus</i>	新亜種	108896	メス	不明	シベリア東部	P. L. Jouy	<i>Dendrocopos leucotos leucotos</i> (<i>ussuriensis</i>) Buturkin, 1907	オオアカガラ	
13 <i>Geococcyx canus</i> <i>griseoviridis</i>	新亜種	114120	オス	不明	ソウル	P. L. Jouy	<i>Picus canus jessoensis</i> (<i>jessoensis</i>) Stejneger, 1886	ヤマガラ	
14 <i>Pericrocotus</i> <i>cinereus intermedius</i>	新亜種	114253	オス	不明	ソウル	P. L. Jouy	<i>Pericrocotus divaricatus</i> Raffles, 1822	サンショウクイ	
15 <i>Olbiorchilus</i> <i>fumigatus peninsulæ</i>	新亜種	114200	メス	不明	釜山	P. L. Jouy	<i>Carduelis sinica ussuriensis</i> Hartert, 1903	カワラヒワ	
16 <i>Olbiorchilus</i> <i>fumigatus amurensis</i>	新亜種	114861	オス	不明	アムール	不明	<i>Troglodytes troglodytes dauricus</i> Dybowski & Taczanowski, 1884	ミノサザイ	
17 <i>Remiz consobrinus</i> <i>suffluis</i>	新亜種	114191	オス	不明	釜山	P. L. Jouy	<i>Remiz consobrinus</i> Swinhoe, 1870	ツリスガラ	
18 <i>Acedula trivirgata</i> <i>magna</i>	新亜種	114186	オス	不明	ソウル	P. L. Jouy	<i>Aegithalos caudatus magnus</i> Clark, AH, 1907	エナガ	

出典：Austin H. Clark, 'Eighteen New Species and One New Genus of Birds from Eastern Asia and the Aleutian Islands', *Proceedings of the United States National Museum* 32 (1907): 467-475.



図3 エゾフクロウ

おびひろ動物園にて著者撮影

そこで実際に確認すると、カタログ番号「121180」はライチョウのメスの標本であり、その採集地と採集人はカタログ番号「121179」のオスと同じで、採集日が1888年8月11日であることがわかった。後述するように、山階鳥類研究所にも「M. Kikuchi」が同年7月から8月にかけて御嶽山と乗鞍岳で採集した標本が収められている。この人物が、1890年代から1920年代初頭にかけて活躍した鳥類採集家の菊池米太郎と関係があるかどうかは、今のところ不明である。

なぜ、1888年に採集された標本が、1907年になって初めて新種として記載されたのだろうか。その背景を探るのが本稿の目的であるが、まずはクラークによるニホンライチョウの記述に戻ろう。現在ではニホンライチョウは亜種として扱われるが、記載当初はライチョウ属のどの既存種とも異なる、新種であると発表された。以下がその文章である。

ライチョウ (*Lagopus rupestris*) 群の色が非常に濃くなった種類のものである。全般的に、*L. ridgwayi* Stejneger [訳注：コマンドルスキー諸島に生息する亜種（当時は種として扱われていた）。現在の学名は、*Lagopus muta ridgwayi*] とよく似た姿をしている。7月に採集した同種の標本よりも、翼上面の蛇行状模様がずっと荒く、また、色は赤褐色ではなく、黄褐色であるという違いがある。胸、体側、脇の色は、*L. ridgwayi* よりも、さらに濃く、*L. evermanni* Elliott [訳注：アリューシャン列島アッツ島に生息する亜種。当時は

種として扱われた。現在の学名は、*Lagopus muta evermanni*]に近い。しかし、わずかにしかない模様は黄褐色で、どちらの種とも異なっている^[9]。

ここで「7月に採集した」と言及されているのは、クラークが1906年の調査航海で採集したライチョウのことである。クラークは、1906年5月から12月まで、アメリカ合衆国漁業局（United States Bureau of Fisheries）の海洋調査船、アルバトロス号に乗り込み、北西太平洋から日本海にかけての海洋調査に参加した。この調査に関しては、当時の漁業局の記録や、クラークの報告、デイヴィッド・ポーソンとドリス・ポーソンによる研究がある。次節では、これらの史資料をもとに、海洋調査の概要をまとめておこう。

(2) クラークによるライチョウの生息分布調査

アルバトロス号の海洋調査の主たる目的は、「アラスカのサケ漁振興のための調査、およびアラスカと日本近海（とくにオホーツク海から日本海）との動物相の関連性の調査」であった。具体的には、サケの回遊ルートに関するデータの収集や、アリューシャン列島、サハリン島、および日本列島の沿岸部の生物分布のデータの収集が行われた。さらに、日露戦争終結後の現地情勢に関する情報収集の側面があったと考えられている^[10]。海洋調査の航路についても確認しておこう。アルバトロス号は、1906年5月13日、ピュージェット湾をはさんでシアトルの西側に位置するピュージェット・サウンド海軍造船所を出航し、アリューシャン列島フォックス諸島のアマクナック島に寄港した。そして、5月24日にアマクナック島の港湾都市ダッチハーバーを出港すると、調査を行いながらアリューシャン列島に沿って西へと向かった。そして、6月中旬に、アリューシャン列島の最西端にあり、また、合衆国領でなくロシア領であるコマンドルスキー諸島のメードヌイ島に至った。そこから、さらに西へ向かいカムチャッカ半島に到達すると、今度は南下し、6月27日に函館に到着した。函館には約2週間滞在した後、日本海へと抜けて、小泊、佐渡島、七尾、敦賀、西郷港、隠岐諸島、松島などに寄り、8月3日には長崎に到着した。その後、さらにトカラ列島まで南下したあと、鹿児島に向かい、そこから九州東岸を北上して瀬戸内海に入り、8月25日に神戸、9月2日に横浜に到着した。横浜にも約2週間滞在した後、今度は本州の太平洋側を北上し、函館を経由してサハリン島テルペニア湾に到達してから、函館へと戻った。その後は、志摩半島まで南下し、そこから調査を行いながら駿河湾、相模湾と北上し、10月26日に横浜に戻った。そして11月10日に横浜を出航し、ホノルルを経由して、12月10日にサンフランシスコに帰港した^[11]。

この海洋調査において、クラーク自身の関心は各種鳥類の地理的分布の調査にあった。シア

トルでアルバトロス号の出港準備を待つ間には、早速、近郊で標本採集を行い、調査で立ち寄った島々でも精力的に採集活動を行った。クラークが新婚の妻に書き綴った手紙からは、なかでもライチョウの採集に力を注いでいたことがわかる。例えば、1906年5月25日、海洋調査の最初の寄港地であるダッチハーバーから送った手紙には、港の背後にある大きな山に同僚と一緒に登り、「ライチョウを5羽とその他の鳥を撃ち落とす」を記している^[12]。一方、カムチャッカではライチョウを探すものの、思うように標本を集めることができなかつたと、妻への手紙に記している^[13]。これらの結果は、帰国後しばらくしてからクラークがまとめた論文に反映された。その論文の一部は、ライチョウとカラフトライチョウの生息分布や、生息地による種の異なりについて論じている。例えば、クラークがダッチハーバーで採集した標本は、ネルソンライチョウ (*Lagopus rupestris nelsoni* Stejneger, 1884) であり、この調査によって従来より詳しい生息地域が判明した^[14]。一方、カムチャッカで捕獲に失敗したカラフトライチョウ (*Lagopus lagopus*) の亜種に関しては、「非常に臆病なために採集することができなかつた」という記述にとどまった^[15]。

このようにクラークは、アルバトロス号の海洋調査によって採集した標本に基づき、寒冷地の鳥類生息分布を明らかにしようとした。しかし、必ずしも全ての種・亜種について十分な標本が得られたわけではないため、帰国後にジューイが集めた標本群など、スミソニアン博物館が所蔵する標本と比較しながら分析した。その過程でクラークは、帝国大学理科大学博物館から寄贈されたニホンライチョウの標本を再発見することになった。したがって、ニホンライチョウの記載は、クラークによるアリューシャン列島からカムチャッカ半島にかけての鳥類生息分布調査の副産物だったとも言える。

以上の経緯から、ニホンライチョウの記載は、ジューイが採集した標本を扱った論文によって行われたものの、実際にはジューイと無関係のように考えられるかもしれない。しかし、鳥類採集家としてのジューイの活動は、ニホンライチョウがスミソニアン博物館に送られたことと無関係であるとは言い切れない。次節では、ジューイに焦点をあて、欧米の鳥類採集家による日本での活動という文脈から、ニホンライチョウ記載の背景を考察する。

(3) ジューイの長野遠征

1856年、ニューヨークに生まれたピエール・ルイス・ジューイは、スミソニアン博物館の発展に尽力したベアード (Spencer Fullerton Baird) のもとで学んだ。そして1881年、博物館の自然史標本拡充のために、ベアードによって中国と日本に標本採集家として派遣された。その後、韓国に渡り、中国海関の釜山税関で働きながら、3年にわたり標本採集を続けた。アメリカ帰

国後は、健康を害したため温暖なアリゾナに移住し、メキシコなどで採集活動を行ったが、1894年に死去した。とくに、朝鮮半島の鳥類生息分布研究の基礎を築いた鳥類採集家として高く評価された^[16]。さらに、河合の調査によって、明治期にスミソニアン博物館に集められた哺乳類、鳥類の多くが、このジューイによって採集されたものであることが判明している^[17]。

本稿にとって重要なのは、ジューイが日本滞在中に行った標本採集である。その行程や成果については、ジューイ自身が *PUSNM* 掲載の報告にまとめている^[18]。それによれば、すでに河合が整理しているように、ジューイは1882年9月から12月にかけて、現在の長野県大町市大出を拠点として立山で採集を行った。ライチョウの採集が目的のひとつだったことはジューイ自身が明記しており、また、ライチョウが立山、御嶽山、槍ヶ岳など生息しているという情報は、海外の鳥類学者の間に知られていた。たしかに、アーネスト・サトウの『中部および北部日本の旅行案内』(1881年初版)には、大町から針ノ木峠を抜けて立山に登るルートが紹介されており、「夏には標高の高い雪溪の縁の付近では、非常におとなしいライチョウがいつも見られることだろう」と書かれている^[19]。

このようにジューイの渡日時点で、ライチョウの生息地域に関する情報はある程度整理されていたが、実際の採集旅行の計画には、日本に滞在する専門家の助けが不可欠であった。この点に関しては、横浜の貿易商・標本商のアラン・オーストンが重要な役割を担った。1853年、イングランドに生まれたオーストンは、1871年に香港を拠点とする貿易商社、レイン・クロフォードの一員として上海支店に派遣された。そして1873年に、新しく開かれた横浜支店に異動した後、しばらくして貿易商として独立し、動物標本も扱うようになった。とくに1890年代から1910年頃にかけて、オーストンは標本商として精力的に活動し、オーストンが収集、調達した標本は、ロンドン自然史博物館、トリング動物学博物館、フンボルト博物館（ベルリン自然史博物館）、スミソニアン博物館など、各国の中核となる自然史博物館に数多く送られた。日本国内においても、オーストンは日本人鳥類学者に標本を提供したり、日本人の標本採集家を育成したりするなど、日本の鳥類学の発展に寄与した人物として知られている^[20]。ジューイが日本を訪れた1882年の時点では、オーストンはまだ独立したばかりだったが、すでに採集活動の後方支援をしていたことがわかる。立山への遠征には、「Mr. Smith」がジューイに同行し、通訳として現地日本人と交渉するだけでなく、標本採集の手助けをした。オーストン商会に関する文書資料を丁寧に掘り起こした川田の研究により、1882年から1884年にかけて「A. J. M. Smith」という人物がオーストン商会の一員であったことがわかっている。「Mr. Smith」は、オーストンの指示でジューイに同行したと推測される^[21]。

(4) ジューイをとりまく鳥類採集家

ジューイはライチョウを入手することができなかったものの、貿易商、動物学者のブラキストン (Thomas Wright Blakiston) が所有する2体の標本を調査する機会を得た。報告書には、「孤立した地域に生息するこの鳥は、おそらくその地に固有の種だと思われるが、適切な記述と比較のための標本がないため、同定することはできなかった」と記している。種名は「ライチョウ属の一種 (*Lagopus s.p.*)」とのみ表記された^[22]。

ジューイは、ブラキストンだけでなくヘンリ・プライア (Henry Pryer) にも謝辞を述べている。プライアは『日本蝶類目録 (*Rhopalocera Nihonica: A Description of the Butterflies of Japan*)』(1886年)の著者であることから、蝶類学の分野でその名がよく知られているかもしれないが、鳥類採集も行い、友人のブラキストンとともに日本に生息する鳥類の目録を作成した人物である。ふたりは、シーボルトの『日本の動物相 (*Fauna Japonica*)』や、台湾島の鳥類学で知られたスウィンホー (Robert Swinhoe) と、1860年代半ばに日本で鳥類採集を行ったヘンリ・ホイトリーの著作を参照しながら、山下博物館 (東京国立博物館の前身)、教育博物館 (国立科学博物館の前身)、および開拓使札幌仮博物館 (北海道大学農学部博物館の前身) 所蔵の標本と、個人所有の標本を網羅的に調査した。そして、その成果を1878年に *Ibis* に発表し、1882年にその改訂版を日本アジア協会の紀要 (*Transactions of the Asiatic Society of Japan*) において発表した^[23]。その間の1880年には、*Ibis* とは異なり、必ずしも鳥類学、動物学の専門的な知識がない読者に対して、より一般的な説明を補足した版を日本アジア協会の紀要に掲載している。このように、1882年にジューイが日本にやって来た頃には、ブラキストンとプライアが日本列島とその周辺における鳥類の生息分布について、最新の知見を有していた。改めてふたりのライチョウに関する記述と、ジューイのライチョウに関する記述とを比較してみると、河合が指摘するように、ジューイがブラキストンたちの影響を受けていた可能性が高いとわかる^[24]。

日本におけるジューイの採集活動については、ブラキストンも当時、横浜で発行されていた在日欧米人向けの雑誌 *The Crysanthemum* において、その成果を報告している^[25]。その報告によって、ジューイの報告に「Mr. Smith」と記載されていた人物が、「Mr. A. J. M. Smith」であったことがわかる。また、ジューイの報告には登場しない「Mr. N. Ota」という人物が、標本の同定作業を助けたと書かれている。なお、オーストン商会の名簿には、1904年から1906年まで「Y. Ota」という人物が登場するが、両者の関係についてはわからない^[26]。ブラキストンによる報告でも、ライチョウが「*Lagopus* ——?」、すなわちライチョウ属の一種として登場する。ジューイの報告と比較すると、純粋に分類学的な説明だけでなく、次のような伝統的な博物学の記述の要素もある。

立山では地元民はライチョウは数多くいると言っていた。また、スミス氏もライチョウの羽と思われるものを見つけた。しかし、標本は得られなかった。狩猟者によれば、彼らは何羽も撃ち落とし、また、ライチョウは非常におとなしいので、棒や石で叩き倒すこともよくあるが、雪が降る季節になると、ライチョウは破砕した岩と岩の間の隙間や、木の洞の中に引きこもってしまうので、めったに見ることができなくなるそうだ。地元の民間信仰では、ライチョウは雷神の眷属であり、ライチョウが山に住むかぎり、その地は雷による破壊から守られると考えられており、ライチョウを祀る絵や祠が、大切に守られ残存している^[27]。

このように豊富な記述は、同じ記事の中の他の種の説明には見られない。ブラキストン自身のライチョウに対する思い入れを反映しているとも解釈できる。ジューイの報告書にあったライチョウへの思い入れも、ブラキストンの影響を受けたものかもしれない。

なお、ブラキストンが収集した標本の足取りを辿った加藤の研究により、ブラキストンは1883年に日本を去った際、それまで主に北海道で採集した標本をスミソニアン博物館に送ったことがわかった^[28]。このブラキストンの標本群とジューイの標本群をもとに、日本の鳥類の包括的な目録を作成しようとしたのが、スミソニアン博物館の鳥類学者であるスタイネガー (Leonhard Hess Stejneger) である。次節では、このスタイネガーに焦点を移し、ニホンライチョウのタイプ標本がスミソニアン博物館に所蔵された経緯を明らかにする。

(5) スタイネガーによる日本の鳥類学研究

ブラキストンが標本採集家として日本の鳥類学の基礎を築いた人物に位置づけられるとすれば、スタイネガーは分類命名を通して日本の鳥類学の基礎を築いた人物と言える^[29]。まず、アメリカ科学アカデミーの伝記録に基づき、スタイネガーが日本の鳥類学に関わるまでの経歴をまとめておこう^[30]。

スタイネガーは、1851年、ノルウェーのベルゲンで生まれた。ドイツ出身の父親はベルゲンで商社を興した人物で、スタイネガー一家はベルゲンでも有数の裕福な家だったと伝えられている。スタイネガーはオスロ大学で学んだ後、父親の商社で仕事を手伝いながら、もともと関心を持っていた動物学の研究も続けた。1871年にはベルリンにあるドイツ鳥学会の会員になり、1878年には最初の新種記載を行った。それは、モズ属の一種 (*Lanius bairdi*) で、スミソニアン博物館のベアードに献名されたが、現在では独立種として認められていない。スタイネガーは、1880年に父親の商社が倒産すると、科学者になることを決意し、ベルリンの鳥類学者ジャン・

カバニス (Jean Louis Cabanis) の助言を得て、1881年8月に渡米した。当時のヨーロッパの自然史博物館では、職を得るのが非常に困難だと判断したからであった。すでに鳥類学の実績を積んでいたスタイネガーは、スミソニアン博物館鳥類部門キュレーターのリッジウェイ (Robert Ridgway) のもとで水鳥の研究などに従事して経験を積むと、1882年には、コマンドルスキー諸島からカムチャッカ半島にかけての海洋調査に参加した。翌年、700点の鳥類標本とともに帰国すると、1885年にその報告をまとめて刊行した。前後して1884年に鳥類部門の副キュレーターに任命されている。

1886年以降、スタイネガーは日本から得られた標本の調査結果を精力的に発表していくことになる。しかし、1889年3月、爬虫類・両生類部門キュレーターが退職すると、スタイネガーはその後任に抜擢されたことから、鳥類標本の調査に集中することが困難になってしまった。とはいえ、日本の鳥類に関する研究が完全に滞ってしまったわけではない。1896年と1897年には、スタイネガーが著し飯島魁が邦訳した「A Manual of Japanese Birds」が『動物学会雑誌』に掲載されている。こうした経緯から、スタイネガーは日本の鳥類学研究の主要な担い手が、従来の欧米の鳥類学者から、日本の鳥類学者へと移行する過渡期の人物として位置づけられる。なお、スタイネガーは、それぞれ1891年と1894年に死去したブラキストンとジューイの追悼記事を執筆している。

それではスタイネガーが1886年、*PUSNM* に発表した報告を見ていこう。スタイネガーは最初に、自身の報告が1884年にブラキストンからスミソニアン博物館に寄贈された標本群に基



図4 アオゲラの展示標本

大町山岳博物館所蔵 (著者撮影)



図5 エゾヤマゲラの展示標本

帯広百年記念館所蔵 (著者撮影)

づくことを明記している。そして、その標本群の特徴として、これまでの日本の鳥類学の基礎資料であった長崎経由で入手された標本とは異なり、日本列島の寒冷地から収集されたものであることを強調した。従来であれば、「日本産」という一言で整理されていた状況が、日本列島内の生息分布に注意しなければならなくなった状況へと変化したことがわかる。この説明の背景には、津軽海峡の南北で動物相が異なるというブラキストンの発見がある(ブラキストン線)。ブラキストンは、シベリア地区に生息する大半の種が北海道でも見られる一方で、本州以南で見られる種がシベリア地区では見られないことを説いていた^[31]。このブラキストン線の証左として、例えば、スタイネガーは本州以南に生息する既記載のアオゲラ (*Picus awokera* Temminck, 1836) (図4) に対して、アオゲラとは異なるヤマゲラでありながら、既記載のヨーロッパ産ヤマゲラの亜種 (*Picus canus canus* Gmelin, JF, 1788) とも異なる北海道産の亜種エゾヤマゲラ (*Picus canus yessoensis*, Stejneger, 1886) を記載している (図5)^[32]。

(6) 見落とされたニホンライチョウ？

このようにスタイネガーは、日本における標本採集が進んだことで、日本の鳥類学が詳細な生息分布の解明の段階に入ったことが告げた。しかし、一方で、それを遂行するためには、まだ十分な標本が入手されていないため、標本収集への協力を広く読者に呼びかけた。

日本の鳥類学に関心を寄せる鳥類学者に、心よりお願いしたい。私には包括的な日本の鳥類目録を完成させるという仕事がある。これを申し分なく達成できるように、資料を集める手助けをしていただけないだろうか。国立博物館 [スミソニアン博物館] は、動物相を解明するために必要な標本の交換に喜んで応じている。また、標本の所有者が標本を手放したくない場合には、経費は当方負担で可及的速やかに返却することになる^[33]。

日本の鳥類標本を積極的に収集しようというスタイネガーの姿勢は、スミソニアン博物館と日本の博物館との間の標本交換にも影響を及ぼした。小林と加藤による山階鳥類研究所所蔵の標本の調査によると、同研究所には帝室博物館が所有していた 3348 点の標本が所蔵されており、その中に含まれる多数の海外産標本の中で、とりわけ「Smithsonian Institution」とラベルに記載された標本が目立つという^[34]。当時のスミソニアン博物館は、精力的に世界各地から標本を収集しており、そのため手段のひとつが、重複する標本を他の博物館の標本と交換することであった。もちろん、無条件に寄贈された標本がなかったわけではないだろうが、当時、スミソニアン博物館から日本に送られた標本の多くは、この交換プログラムによって送られた標

本であった。小林と加藤の調査により、1887年と1888年にかけて、スミソニアン博物館のスタイネガーと教育博物館の波江元吉との交友を通して両博物館の間で活発に標本交換が行われたことが判明している^[35]。

しかし、本稿の冒頭で確認したとおり、スミソニアン博物館所蔵のニホンライチョウの標本は、採集されたのは1888年だが、スミソニアン博物館に登録されたのは1891年である。また、送ったのは教育博物館ではなく、帝国大学理科大学博物館であった。スタイネガーが1891年に*PUSNM*に発表した報告には、その経緯が説明されている。1888年の教育博物館の解体にともない、教育博物館所蔵の鳥類標本が帝国大学理科大学博物館に移管された。この時、理科大学動物学教室の飯島魁が、スタイネガーによる日本の鳥類生息分布の調査に資するため、同標本群をスミソニアン博物館に送付したという^[36]。標本は少なくとも3度に分けて送られた。その標本群を調査したスタイネガーは、日本では未確認の18種を確認し、一部を新種として記載した^[37]。例えば、飯島に献名されイイジマクイムシ (*Acanthopnesuste ijimae*) は、その一例である。スミソニアン博物館所蔵のタイプ標本の旧ラベルには、センダイムシクイ (*Phylloscopus ijimae*) と書かれている。このことから、もともとは日本列島では北海道から九州にかけて生息するセンダイムシクイの標本として飯島より寄贈された標本が、スタイネガーによって異なる種であると判断され、新種として記載されたことがわかる^[38]。なお、スタイネガーによる各標本の解説には、帝国大学理科大学博物館のカタログ番号が掲載されているため、オンライン公開されている山階鳥類研究所所蔵のいくつかの標本の写真と照合したところ、理科大学博物館移管時の旧ラベル（教育博物館時代からのラベルではないかと思われる）に記載されたカタログ番号と一致し、スタイネガーが報告した標本の少なくとも一部は、山階鳥類研究所に現存することがわかった。

そこで、改めてこの時期に帝国大学理科大学博物館からスミソニアン博物館に送られたライチョウのオスのタイプ標本とメスの標本のラベルを確認すると、旧ラベルのカタログ番号は、それぞれ155、163であった。これらの情報を整理すると、表2のようになる。旧カタログ番号では、「M. Kikuchi」が採集したライチョウが連番になっていることから、現在の所蔵が未確認の161と162もニホンライチョウの標本であった可能性が高い。帝国大学理科大学博物館に移管された全標本が送られたという、先述のスタイネガーの説明を信じるのであれば、1888年7月～8月に乗鞍山と御嶽山で採集されたニホンライチョウは、全てスミソニアン博物館に送られ、そのうちオスとメスそれぞれ1体がスミソニアン博物館に残されたことになる。一対のみ理科大学博物館からスミソニアン博物館に寄贈されたのか、あるいは、何らかの理由により返却されなかったのかは、現時点ではわからない。スタイネガーの報告には、ライチョウについての記述がないため、スタイネガーはこれをライチョウの新種とは認識しなかったのだろう。

表2 「M. Kikuchi」が採集したニホンライチョウの標本一覧

旧カタログ番号	現在の所蔵とカタログ番号		雌雄	採集日	採集地
155	スミソニアン博物館	121179	オス	1888年7月29日	御嶽山
156	山階鳥類研究所	YIO-16390	オス	1888年8月	乗鞍山
157	山階鳥類研究所	YIO-16389	オス	1888年8月	乗鞍山
158	山階鳥類研究所	YIO-16388	メス	1888年8月	乗鞍山
159	山階鳥類研究所	YIO-16391	オス	1888年8月	御嶽山
160	山階鳥類研究所	YIO-16392	オス	1888年8月	乗鞍山
163	スミソニアン博物館	121180	メス	1888年8月11日	御嶽山
164	山階鳥類研究所	YIO-16393	オス	1888年8月22日	乗鞍山
165	山階鳥類研究所	YIO-16398	メス	1888年7月19日	御嶽山
166	山階鳥類研究所	YIO-16397	オス	1888年8月10日	御嶽山
167	山階鳥類研究所	YIO-16394	オス	1888年8月17日	乗鞍山
168	山階鳥類研究所	YIO-16395	メス	1888年8月17日	乗鞍山
169	山階鳥類研究所	YIO-16396	オス	1888年8月17日	乗鞍山

出典：山階鳥類研究所「標本データベース」<https://decochan.net>（2021年6月30日最終確認）；
Smithsonian National Museum of Natural History, 'Research Collections: Division of Birds',
<https://collections.nmnh.si.edu/search/>（2021年6月30日最終確認）。

記述されなかった理由についても推測を重ねるしかないが、そもそもスタイネガーは送られてきたすべての標本をとりあげるのではなく、考察に値するものだけを報告するつもりであった。ライチョウの標本が既記載の *Lagopus mutus*（当時の表記による）と同じであると判断されたのであれば、すでにライチョウが本州中部の山岳地帯に生息することは知られていたため、その標本に新たな価値が見出されることはなかったとしても、おかしくはない。そもそも、すでに鳥類学部門から離れていたスタイネガーには、全標本を精査する十分な時間がなかったのかもしれない。

いずれにしても、スミソニアン博物館のニホンライチョウの標本は、博物館がそれを入手した時点では、特段の関心が向けられることはなかった。クラークがこれを調査し、1907年にニホンライチョウを記載するまで、それから15年程度の時間を要したのである。

おわりに

本稿は、19世紀末から20世紀初頭の鳥類採集と鳥類学の歴史をふまえて、ニホンライチョウの標本採集から記載までの間の空白期間について考察した。以下に、これまでの調査で明らかになった点を整理しておく。

まず、本州の立山などにライチョウが生息していることは、ブラキストンとプライアの調査によって、19世紀後半にはすでに欧米の鳥類学者や鳥類採集家の知るところとなっていた。1881年にジューイが日本を訪れ標本採集を行ったとき、ブラキストンはすでに本州で採集されたライチョウの標本を所有していたと記録されていることから、ジューイも立山でライチョウが採集できると強く期待していた。結局、立山への遠征ではライチョウを採集することはできなかったため、ジューイの調査報告には、ブラキストンが所有する標本をもとに、ライチョウ属の新種とのみ記録された。ライチョウ属の新種と記録された点は、ブラキストン本人の報告とも一致する。なお、ジューイの採集活動を援助したのが、横浜で貿易商を営み、標本の仲買人や調達業者としても知られていたアラン・オーストンであった。ブラキストンの報告には、オーストン商会の一員である「A. J. M. Smith」や、オーストンと関係があると思われる「A. Ota」が、それぞれ標本採集と同定を助けたことが示されていた。

その後、オーストンは事業を拡大し、日本人採集家を育成したり、日本人動物学者、鳥類学者に標本を提供したりするなど、黎明期の日本の動物学を支える人物となった。こうして標本採集に携わる日本人が徐々に増えてくるなかで、1888年7月から8月にかけて、「M. Kikuchi」によってライチョウが御岳山と乗鞍岳で採集され、教育博物館に置かれた。同じ頃、スミソニアン博物館では鳥類部門の副キュレーターに就任したスタイネガーが日本の鳥類相に強い関心を抱き、教育博物館との標本交換を推進していた。しかし、教育博物館が廃止されることになったため、博物館所蔵の鳥類標本は帝国大学理科大学博物館に移管された。その際、理科大学動物学研究室の飯島魁が、移管された標本をスタイネガーの研究に資するため、スミソニアン博物館に送った。現在、スミソニアン博物館にあるニホンライチョウのタイプ標本（オス）と、もう一体の標本（メス）は、この時に送られたものと推定される。これらの標本には教育博物館時代のものと思われるラベルがつけられており、その形式は山階鳥類研究所が所蔵する「M. Kikuchi」採集のニホンライチョウ標本の旧ラベルの形式と一致する。これにより、「M. Kikuchi」が少なくとも13体、現存が確認できない標本も入れると、おそらく合計15体の標本を採集し、それらには155から169というカタログ番号がつけられたことが判明した。

スタイネガーは飯島から送られてきた標本を調査し、できる限り新種・新亜種を記載したが、ニホンライチョウの標本はその目には留まらなかった。もしくは、新種・新亜種とは認められ

なかった。その標本を再調査したのは、ライチョウの生息分布と新種記載を行ったクラークであった。アルバトロス号による調査航海により、クラークはアリューシャン列島からカムチャッカ半島、日本列島沿岸部にかけての鳥類の生息分布を調査した。そして、帰国後、アリューシャン列島、日本列島、朝鮮半島の渡り鳥と留鳥を整理するため、スミソニアン博物館に保管されていた標本にあたったのである。それによって、ジュイーが採集した標本などから未記載の種・亜種が見つかったため、それらを主要な調査報告とは別に発表したのが、*PUSNM* 掲載の「東アジアおよびアリューシャン列島の鳥類 18 新種・1 新属」であった。そのため、ニホンライチョウは、アリューシャン列島アダック島のライチョウ亜種 *Lagopus muta chamberlaini* や、朝鮮半島の新種の鳥類とともに記載されたのである。

今回の調査は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての学術誌などの刊行物と、関連する先行研究、およびオンライン公開されているスミソニアン博物館と山階鳥類研究所所蔵の標本を主要な史資料とした。さらに、書簡史料なども含めて新たな史資料を発掘し、推測の域を出ない点について検証を進めることが、今後の課題である。

本稿は、2020 年度専修大学人文科学研究科総合研究調査、および JSPS 科研費（課題番号：17KK0021）による研究成果の一部である。

注

- [1] 長野県「長野県のシンボル」<https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/gaiyo/shoukai/symbol.html> (2021 年 5 月 20 日最終確認)。他に岐阜県と富山県でも県鳥として指定されている。中村浩志「ライチョウ *lagopus mutus japonicus*」『日本鳥学会誌』56-2(2007): 93-114.
- [2] 環境省「ライチョウ」<https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/raicho.html> ; 環境省「レッドリストのカテゴリー」<https://www.env.go.jp/nature/kisho/hozen/redlist/rank.html> (2021 年 5 月 29 日最終確認)。ライチョウの保全については、楠田哲士編『神の鳥ライチョウの生態と保全—日本の宝を未来へつなぐ』(緑書房, 2020 年)。
- [3] 日本鳥学会「日本鳥類目録改訂に向けた第一回パブリックコメント」<http://ornithology.jp/iinkai/mokuroku/index.html> (2021 年 6 月 26 日最終確認)。
- [4] Austin H. Clark, 'Eighteen New Species and One New Genus of Birds from Eastern Asia and the Aleutian Islands', *Proceedings of the United States National Museum* 32 (1907): 467-475.
- [5] 河合久仁子「博物館標本から読み解かれるもの」『山と博物館』57-10 (2012): 1-10.
- [6] Normand David and Michel Gosselin 'The Grammatical Gender of Avian Genera', *Bulletin of British Ornithologists' Club* 122 (2002): 279. 日本の動物園や博物館では、ライチョウやニホンライチョウの展示において旧学名での表記が一部残っている。
- [7] 河合久仁子「博物館標本から読み解かれるもの」5.
- [8] Smithsonian Institution, 'National Museum of Natural History: Search Museum Collection Records', <https://collections.nmnh.si.edu/search/> (2021 年 5 月 30 日最終確認)。

- [9] Clark, 'Eighteen New Species and One New Genus of Birds' 469.
- [10] Bureau of Fisheries, *Report of the Commissioner of Fisheries for the Fiscal Year Ended June 30, 1906* (Washington: Government Printing Office, 1906) 11; David L. Pawson and Doris J. Pawson, 'Diary of an Ardent Naturalist: Letters from Austin H. Clark to his Wife from the 1906 Research Cruise of the Steamer Albatross', *Marine Fisheries Review* 80-4 (2019): 5.
- [11] Austin Hobart Clark, 'The Birds Collected and Observed during the Cruise of the United States Fisheries Steamer "Albatross" in the North Pacific Ocean and in the Bering, Okhotsk, Japan and Eastern Seas from April to December, 1906', *Proceedings of the United States National Museum* 38 (1911): 25-27.
- [12] David L. Pawson and Doris J. Pawson, 'Diary of an Ardent Naturalist: Letters from Austin H. Clark to his Wife from the 1906 Research Cruise of the Steamer Albatross', *Marine Fisheries Review* 80-4 (2019): 21. この「大きな山」とは、「バリーフー山」(Mt. Ballyhoo) であると考えられる。
- [13] Pawson and Pawson, 'Diary of an Ardent Naturalist' 23.
- [14] Clark, 'The Birds Collected and Observed' 55.
- [15] Clark, 'The Birds Collected and Observed' 54.
- [16] Leonhard Stejneger, '[Obituary of Pierre Louis Jouy]', *Auk* 11 (1891): 262; Oliver L. Austin, Jr., 'The Birds of Korea', *Bulletin of the Museum of Comparative Zoology at Harvard College in Cambridge* 101 (1948-9): 8.
- [17] 河合「博物館標本から読み解かれるもの」4.
- [18] Pierre Louis Jouy, 'Ornithological Notes on Collections Made in Japan from June to December, 1882', *Proceedings of the United States National Museum* 6 (1883): 273-275.
- [19] 河合「博物館標本から読み解かれるもの」5; Ernest Mason Satow and A. G. S. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* (London, 1884): 266.
- [20] 川田伸一郎「アラン・オーストン基礎資料」『山階鳥学雑誌』47 (2016): 59-93; 磯野直秀『三崎臨海実験所を去来した人たち——日本における動物学の誕生』(学会出版センター、1988年) 53-56.
- [21] 川田「アラン・オーストン基礎資料」62.
- [22] Pierre Louis Jouy, 'Ornithological Notes on Collections Made in Japan from June to December, 1882', *Proceedings of the United States National Museum* 6 (1883): 315.
- [23] T. Blakiston and H. Pryer, 'A Catalogue of the Birds of Japan', *Ibis* 4th ser., 2 (1878): 209-250; T. Blakiston and H. Pryer, 'Catalogue of the Birds of Japan', *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 8 (1880): 172-241; T. W. Blakiston and H. Pryer, 'Birds of Japan' *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 10 (1881-82): 84-186.
- [24] Blakiston and Pryer, 'A Catalogue of the Birds of Japan', *Ibis* 248; Blakiston and Pryer, 'Catalogue of the Birds of Japan', *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 8: 204; Blakiston and Pryer, 'Birds of Japan', *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 10: 127-128.
- [25] T. Blakiston, 'Ornithological Notes III: Messers. Jouy and Smith's Late Collections', *Chrysanthemum: A Monthly Magazine for Japan and the Far East* 3-2 (1883): 76-81.
- [26] 川田「アラン・オーストン基礎資料」62.
- [27] Blakiston, 'Ornithological Notes III' 77.
- [28] 加藤克「ブラキストンの鳥類標本ノートについて」『北大植物園研究紀要』13 (2013): 35-47.
- [29] 西海功「分類学・系統地理学研究の歩みと成果」日本鳥学会編『日本鳥学会 100年の歴史』(日本鳥学会誌日本鳥学会 100周年記念特別号) 35.
- [30] 以降の段落に記載のスタイネガーの経歴は、次の文献に依拠する。Alexander Wetmore, 'Biographical Memoir of Leonhard Hess Stejneger, 1851-1943', *National Academy of Science: Biographical Memoirs* 24 (1945): 145-195.
- [31] Leonard Stejneger, 'Review of Japanese Birds: I Woodpeckers', *Proceedings of the United States National Museum* 9 (1886): 99-100.
- [32] Stejneger, 'Review of Japanese Birds: I Woodpeckers' 104-106.
- [33] Stejneger, 'Review of Japanese Birds: I Woodpeckers' 101.
- [34] 小林さやか、加藤克「東京帝室博物館旧蔵鳥類標本コレクションの歴史——スミソニアン米国立博物館に由来する標本に注目して」『日本動物分類学会誌』49 (2020): 45-55.

- [35] 小林、加藤「東京帝室博物館旧蔵鳥類標本コレクションの歴史」50.
- [36] Leonard Stejneger, 'Notes on Japanese Birds contained in the Science College Museum, Imperial University, Tokyo, Japan', *Proceedings of the United States Museum* 14 (1991): 489. 並松信久「近代日本における博物館政策の展開」『京都産業大学日本文化研究所紀要』21 (2016): 267.
- [37] Leonard Stejneger, 'Notes on a Third Installment of Japanese Birds contained in the Science College Museum, Imperial University, Tokyo, Japan', *Proceedings of the United States Museum* 16 (1893): 615.
- [38] Leonhard Stejneger, 'Two Additions to the Japanese Avifauna, including Description of a New Species', *Proceedings of the United States National Museum* 15 (1892): 371. スミソニアン博物館所蔵のタイプ標本のカタログ番号は111663。